第2部

【パネルディスカッション】

上田市はどう取り組んできたか

パネリスト：小山　晃　小野塚究　増田善雄　浅井常子

コメンテーター：阿部　裕　佐藤郡衛

進行：井上　洋

（左から）井上　洋、阿部　裕、佐藤郡衛、小山　晃、小野塚究、増田善雄、浅井常子

大木　第2部に移ります。パネリストとコメンテーターをご紹介申し上げますので、ご登壇願います。

お1人目、上田市市民生活部市民課長の小山晃様。続いて、小野塚究様。上田市教育委員会学校教育課長です。続いて、上田市立東小学校長の増田善雄様。パネリストの最後は、浅井常子様。「親と子の日本語教室」の代表者です。コメンテーターとして、本学特任研究員の阿部裕、同じく特任研究員の佐藤郡衛です。進行は、特任研究員の井上洋に一任します。

井上　それでは、これからパネルトークという形で進めてまいります。前半は今ご紹介した4人の方にご説明をいただき、これが一巡したら、コメンテーターとして佐藤先生、阿部先生、それから先ほど鼎談に参加された田村さん、ウラノさ

んにもコメントをお願いすることになると思いますので、よろしくお願いします。フロアからのご質問もいただく予定です。それではまず、小山さんから「支援会議の取り組み」ということでお話をいただきます。

● 上田市と市の在住外国人の概要

小山　晃　上田市の市民課長の小山です。私は、大学を卒業して市役所に入って29年になります。だいぶいろいろな職場を回って、公害を皮切りに、住宅、観光、交通対策などを経て今は市民課で外国人施策も担当していますが、1年半ぐらいということで、皆さんに比べたらまるきり素人ではないかと思います。

市民課には外国人登録の関係で外国籍市民サービス係が今年から正式にできました。以前からかかわりはありましたが、分かりやすい名称の係に位置付けられて、外国人施策は私どもの中で一番課題の業務になっています。また、外国人集住都市にも参加しており、こちらのほうは労働問題を担当して、四苦八苦しているという状況です。

今日は上田市から関係者4人ということもあって、少し観光などのPRもしてこいと市長から言われまして、少し触れさせていただけたらと思います。

上田市ですが、東京から長野新幹線で1時間半、鉄道の長さでほぼ200㌔です。長野新幹線は、長野冬季オリンピックの前年の97年10月に開通しました。それまでは東京へは2時間半かかっていましたが1時間短縮され、非常に近い距離になりました。外国人登録者数を含む人口は16万6,000人余で、06年3月6日の4市町村合併で4万人ほど増えています。また、外国人登録も、合併で少し増えて、5,600人余ということです。県内の市の大きさでは3番目ですが、外国人は県内でも一番多く、次に長野、松本という順番です。標高は、市役所のあるところが450㍍で、一番高いところが2,300㍍。これは菅平高原四阿山で、夏はラグビー、冬はスキーで賑わい、オリンピックで優勝したマラソンの野口みずきさんも高地トレーニングに使っていらっしゃいます。年間降水量が1,000㍉弱で晴れの日が多いため、映画のロケには非常に適していることもあり、最近では神山征二郎監督の「最後の早慶戦」ロケが行われ、1,000人のエキストラ募集があり、私も参加しました。NHKの大河ドラマ「風林火山」が現在放映されていて、武田と上杉の戦いが行われた川中島、あるいは上田原合戦は上田市周辺が舞台となっています。上田城は、最近は桜に力を入れていて、上田城千本桜まつりが4月の中旬から下旬に行われて、上田真田まつりも行われています。真田幸村公の家紋の「六文銭」につきましては、仏教では死者の手向けにいるお金だそうです。武士

小山　晃

にとって、この戦いは生きて帰らないという意気込みを伝えるということで。私が観光課にいたときには、「三途の川の片道切符」というような言い方をしましたが、博物館からは「あまりでたらめを言うな」と言われたこともあります。

本題に入らせていただきます。外国人登録者の現況です（資料 p.113、116 参照）。ピークは、05 年の 6,300 人余で、現在は 5,600 人ほどです。国籍別で見ると、ブラジルが約半分の 3,000 人、中国が 1,000 人、ペルーが 500 人ということで、在留資格は、これはほかのところとだいたい傾向は一緒で、定住者、永住者、日本人の配偶者などというところです（資料 p.114 参照）。このほかに、市内には信州大学繊維学部と長野大学があり、両校合わせて 200 人少々の留学生がいます。

● 行政はどう対応したか

外国籍市民への支援の経過を説明します。スタートは 96 年ごろかと思いますが、この時点で約 2,000 人の外国人登録者があり、秘書課に日系ブラジル人を嘱託職員で雇って、主にポルトガル語の通訳、翻訳から始まっています。98 年には、広報誌をポルトガル語で発行し始め、現在でも続いています。2000 年になって、今度はそういった業務が市民課の方に移って、02 年は、外国人登録者数は約 5,000 人を超えました。定住者に対しては『生活ガイドブック』、上田市での暮らしのいろいろなことをリーフレットで渡していますが、そういったものを 4 カ国語のガイドブックで発行し始めたのがこのころです。現在は、ポルトガル語、中国語、スペイン語、英語の 4 カ国語を発行しています。長野県も同じようなものを発行していますが、県の場合だと、これに加えて、タガログ語、韓国語です。

05 年に、市民課に係長を置き、07 年に外国籍市民サービス係と改称しました。この係では、正規職員、任期付職員、嘱託職員の合計 3 人により、ポルトガル語の対応をしております。このほか、「ことばのサポーター」という制度があります。市民に呼び掛けて、通訳、翻訳機関の登録をお願いし、現在では 12 カ国 57 人が登録しています。

続いて、上田市外国籍市民支援会議の設立です（資料 p.116 ～ 119 参照）。これは外国人の支援を市全体で取り組むために、行政に加えて市民あるいはいろいろな団体に呼び掛けてつくったもので、05 年 11 月に設立されました。きっかけ

は、市長の公約で設立された「うえだ百勇士委員会」という政策提言団体で、外国人を支援する団体をつくってほしい、つくるべきだという提言があり、その意を酌んで市長の指示で設立の準備がされました。「うえだ百勇士委員会」は、猿飛佐助や霧隠才蔵といった江戸時代に講談で登場した真田十勇士にちなんだもので、当初約100人でスタートして、現在は70人ぐらいで続いており、「しらせ隊」「みつけ隊」「つきあい隊」など、いろいろな隊をつくって市政への提言が行われています。上田市外国籍市民支援会議の会長は市長で、設立のアドバイザーは明治大学の山脇啓造教授にお願いして、そのほか、国、県ほかの団体の皆さんにもアドバイザーになっていただいて、32団体でスタートし、年1回程度の会議を開催しています。

活動の内容としては、大きく言うと多文化共生社会の実現になりますが、①外国籍市民の実態の把握、②諸団体との連絡の調整、③外国人支援のための指針、計画の策定――です。活動の状況としては、まず、設立から約1年かけて上田市の多文化共生に関する調査を行いました。その内容は、①市に住んでいる外国人の成人に対する調査、②外国人ではない一般市民に対する調査、③公立小学校に通っている外国人の子どもに対する調査、④市内にひとつと隣接の市にあるブラジル人学校の子どもたちへの調査、公立小学校に通っている日本人の保護者への意識調査、先生への調査――を行いました。

こういった調査で現状を把握して、その後、多文化共生の推進指針を策定し、取り組みについては、3つの柱を設けました。コミュニケーション支援、生活支援、多文化共生と地域づくりという柱を立て、06年に総務省が示した多文化共生推進プランに沿って上田市の基本的な推進の指針をつくりました。

今後の方向性ですが、推進指針が作成されましたので、これからは、この指針に沿った事業の展開が待たれるわけで、市を中心に参加団体の推進計画をまとめて、それを上田市外国籍市民支援会議の全体の中で了解を得ていくというものです。さらには、具体的な支援の事業にだんだん移っていくわけですが、事業を推進する推進組織の設立をどうするかが課題であり、会員から会費なり、資金の提供を受けて運営する方向です。上田市の場合、企業13社が支援会議に入っていて、その企業の皆さんにどういう形で推進の組織に入ってもらうかという点が非常に大きな課題です。

具体的な事業はこれからというのも多いのですが、先行して実施しているものがあります。現在、ボランティア団体により日本語教室を行っていただいているのですけれども、指導者が非常に不足しているため、東京外大の協力を得て全8

回コースで、日本語指導者の入門講座の募集をしたところ、思った以上に応募者が多くて、外国人に対する関心の高さは私たちの予想を超えていました。

井上　観光案内なども含めたので少し時間がオーバーしていますが、佐藤さんからどうしてもここで質問しておきたいことはありますか。

佐藤郡衛　2つだけ確認させてください。ひとつは、05年に支援会議を立ち上げたり、非常に大きな転換をしたとお話しいただいたのですが、なぜ転換したのかというのが1点。もう1点は、外国籍市民支援会議の中に外国籍住民の方が入っているのかどうか、もし入っている場合はその人選はどうなっているのか、この2点だけ確認させてください。

小山　これは、04年に外国籍市民の支援組織設立に関する「うえだ百勇士委員会」からの要望があり、それに基づいて支援会議を立ち上げてまいりました。背景には外国人が非常に多くなってきて、いろいろなところで、特に教育問題、言葉の問題、子どもの問題などの点で、この時期に何とかしなければという危機感があったと思います。その辺が転換点になっていたと思います。それから支援会議への外国人の皆さんの参加ですけれども、地区の自治会の会議など、いろいろなところで呼び掛けても、皆さん予定をつけて出てくるのが非常に大変だという状況です。ゴミのルールの説明会を開いても5、6人出ていただければ多い方だというようなこともあります。支援会議への外国籍住民の参加については、団体としては、上田地域ブラジル人協会が1団体入っています。そのほか、参加団体の上田市国際交流協議会に、2つの大学の留学生会が所属していますので、合計2団体となります。

井上　どうもありがとうございました。引き続き小野塚学校教育課長からお願いします。

小野塚究

●教育の現場で起きたこと

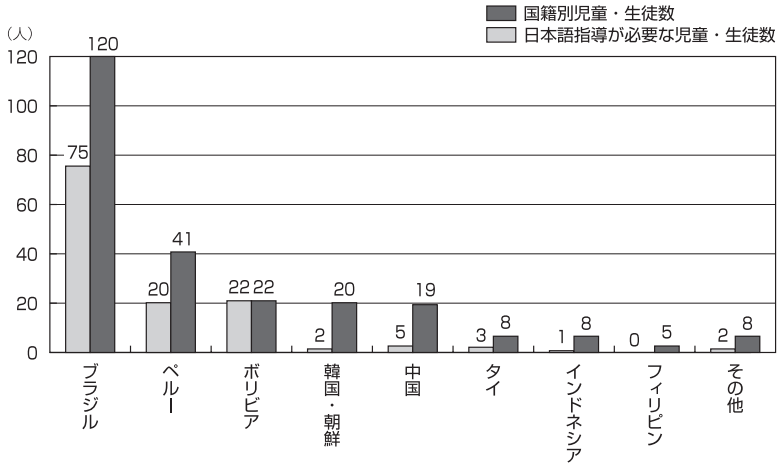
小野塚究　皆さん、こんにちは。上田市教育委員会学校教育課長の小野塚です。「集中日本語教室の取り組み」ということで、ご説明したいと思います。

上田市の小中学校における外国籍児童・生徒数の推移です（資料p.114参照）。90年の入管法の改正以来、上田市は外国人登録者数が急増していますが、これに比例して外国籍児童・生徒数も増加してきました。2000年度から07年度で約2倍になっています。ただ、この中で05年度までは合併前

の旧上田市の数字です。06年度に新しくなって4市町村が合併しましたけれども、ここで増加した分は、周辺の3市町村15人ほどが増えたということです。ですから、ほとんどは旧上田市に在籍の子どもたちです。

学校数は、上田市には小学校が25校ありますが、そのうち19校に外国籍の子どもたちがいます。中学校においては、11校中9校に外国籍の子どもたちがいます。これを旧上田市に限っていうと、小学校16校、中学校7校ありますが、この全校に外国籍の子どもたちが在籍しているという状況です。児童・生徒の国別の状況ですが、児童・生徒の中でブラジルが約半分、約7割が南米系の子どもたちということになると思います。その他は、フィリピンや中国などが入っています（下グラフ参照）。

■公立小中学校における国籍別児童・生徒数（2006年5月）



外国籍児童・生徒が就学する場合の対応ですが、まず、外国籍の児童・生徒に就学の義務があるのかどうかということですが、日本の憲法26条では、すべての国民は、その保護する子女に教育を受けさせる義務を負うと。従って、国民でない外国人には就学義務がないということになるかとは思いますが、国際人権規約A第13条によると、初等教育は義務的なものとしてすべての者に対して無償のものとすると。これは1979年に日本も批准しているので、これに照らし合わせると、外国籍の子どもに対しては日本の教育を受ける義務、あるいは受けさせる義務はないけれども、子どもの教育を受ける権利を保障するために、各教育委

員会では就学の希望に応じて受け入れているのが現状だと思います。

外国籍の子どもたちが就学する場合の手続きですけれども、まず子どもの転入時、主には外国人登録の際に、こちらの窓口で就学の希望を聞いています。この窓口は市民課にありますので、先ほどお話が出ましたが、バイリンガルの職員がいますので、ポルトガル語などでも十分聞くことができます。その中で希望を聞きながら、小中学校を希望する場合には、教育委員会で詳細に説明をし、就学承認願を提出し就学する。

外国籍の子どもに限らず、転入・転居などによる就学手続きについては、教育委員会で行っています。教育委員会には外国語を話す職員は残念ながらいないけれども、できるだけ通訳のできる方、企業の方や友人、親類の方、場合によっては市民課の方が同行するということもあります。その中で話を聞きながら就学手続きをしています。そのほかにブラジル人学校として、市内には「ダマスコ」、隣の東御市に「ピタゴラス」、それぞれ50人、30人が学んでいます。

外国籍児童・生徒が増えたことに対しての支援の仕方について説明します。まず教員の配置ですが、教員は県職で、県教委の方から配置という形になります。日本語の教育を担当する職員は、臨時の講師、ただフルタイムということで、これを加配していただく。これを外国籍児童・生徒の多い小中学校に配置していただく。ただ、日本語教室を開く先生ですが、日本人の先生ですので、どうしても言葉については多少ハンディがある。

市独自の施策として、指導員を配置しています。これは92年から実施していますが、日本語が不自由な児童・生徒が在籍している学校に対して、週1回程度、ポルトガル語かスペイン語の話せる指導員を派遣して主に日本語指導をしているというのが現状です。これは、現在、小学校11校、中学校5校に設置しています。ただ、時間が1回3時間、週1回程度ということで、十分な策にはなっていないのが現状です。

日本語指導教員の役割ですけれども、4点ほどあります。日本語指導、生活指導、保護者との連絡、帰国を控えた児童・生徒に対する母語の指導という4つを柱としていますが、時間的な制約があり、すべて行うのは非常に難しいのが現状です。

●「虹のかけはし」の誕生

また、外国籍児童・生徒にとって、周りがすべて日本語の生活の中で母語を理解している指導員はよき相談相手となったり、心のよりどころとなるという効果

もあると思います。また家庭からも信頼されて相談に乗るといったことも、これはボランティア的な発想になるかもしれませんけれども、要望があります。ただ、こういう策を打ち出していますけれども、どうしても課題は出てきています。児童・生徒数の急増に伴いまして、言葉が通じない、指導が満足にできない。子どもたちにとっても、来日直後ということもあり、日本語が分からないので生活習慣が分からないといったことが多々あろうかと思います。

特に近年、例えば、昨日来日して明日から学校に通いたい、あるいは入れたいといったケースが増えてきています。当然、日本語は分からないし、生活習慣も知らないということで、受け入れた学校側も非常に苦労しているという結果になっています。そこで新しい策として、2つ展開してきました。ひとつは、外国籍児童・生徒の支援員を配するということ。2つ目は、集中日本語教室「虹のかけはし」の開設です。

外国籍児童・生徒の支援は、市民課に2人のバイリンガル職員がおりますけれども、このうちの1人を学校教育課と兼務にしていただいて、連携をしながら就学指導などに当たっていただく。それから保護者と学校間の連絡、あるいは必要な配布文書の翻訳といったもの。ただ、この翻訳といってもすべての学校から出る文章を翻訳はとてもできないので、ある程度、全校に共通的なものだとか必要最低限のものについては、翻訳しながら共通で使用しているというものです。

集中日本語教室「虹のかけはし」で就学の案内といったことを受け持ってもらっています。その「虹のかけはし」ですが、これは県と市が共同で立ち上げたものです。県の方はこれをなぜ上田につくったかということですが、当然、上田は外国籍児童数が多いということがひとつだと思います。ただ、上田では先ほど話が出た市民の支援会議が立ち上がっていること、「親と子の日本語教室」というのが非常に盛んであること、それに伴って熱心なボランティアがいる。こういうことが設置の要因となって、県としてはモデルケースとして上田に開設を決めたということです。

この学校では、一定期間、基礎的な日本語と日本の生活習慣を集中的に学習するということで、スムーズな日本の学校生活が送れるように支援をしていくという、日本の学校に通う前にプレスクール的な役割を担ってもらっています。開設場所ですが、一番初め東小学校に06年8月に開設しました。2校目として、南小学校に07年5月に開設しました。上田市は市の中央を千曲川が流れていて、その右岸と左岸に1カ所ずつということで、いずれの学校ももともと外国籍児童が非常に多かったということもあって、そこをひとつの拠点として教室を持った

わけです。指導体制については、これは1校当たりですけれどもバイリンガル教員1人、バイリンガル指導員1人、ボランティア数人に入ってもらいながら運営しています。

学校に通う場合には、居住している地域によって就学する学校が決まってしまいます。従って、どこに住民登録するかによって学校が決まるわけです。ただ、いきなりこの学校に行っても日本語が分からないといった場合には、籍はその学校に置きながら「虹のかけはし」に通うという形になります。このときのルールですが、通学については各自、保護者の責任で行ってもらう。給食費、教材費その他は負担してもらう。在籍については最長6カ月。教室修了後はそれぞれの在籍校に戻り、在籍校に日本語教室があった場合はそちらに通いながら、最終的に在籍する学級へということが今のところの流れです。

● 課題は多言語対応と人材確保

この教室を開設の一番ネックになるのではないかと思ったのは通学です。心配はしていましたけれども、実際に始めてみると学校に通う子どもたちの親同士が送り迎えを分担したりしながら、あるいは親の仕事が終わるまでその子を預かるといったことを共同でやるようになったり、通学については今のところスムーズにいっています。

現在の「虹のかけはし」の在籍状況は、東小学校では開設時6人、最大20人で、現在では7人ほどです。南小学校は開設時3人、現在は4人でやっています。また、南小学校には中国籍の子どもたちが多く通ってくるということで、今はその対応が課題になっているということです。

今後の課題と支援の方向性ですが、ポルトガル語、スペイン語以外の言語への対応。先ほどの中国語といったこともあります。それから指導する人材の確保。外国人が多いということは、両国語を話せる人が多々いると思いますが、やはり教育の場ということで、教育的な指導ができる人、人材を確保するのが非常に難しい。教室は小学校1年から中学校3年まで、年齢層に幅があります。語学のレベルも、すぐ来た子と6カ月くらいたっている子は違う、同じ教室の中に異年齢の子もいる、レベルの違う子もいるということで教える難しさがあるかと思います。今後については、外国人登録者数の増減、他の集住都市の情報や先進事例などを参考に、今後の支援の仕方を検討していきたいと思っています。

上田市では、こうやって県教委の理解を得ながらプレスクールを立ち上げることができましたが、この教室を大切にしながら外国籍児童・生徒が楽しく学校生

活を送ることができるように。また、何より学校は学問を学ぶところですので、十分に知識を吸収して学力を身につけることができるように、行政としても支援していきたいと思っています。

井上　どうもありがとうございました。今のご説明に対して、コメンテーターの方から何かありますか。

阿部　ひとつお聞きします。外国籍のお子さんを目にすると、やはり心の問題を持った子どもたち、あるいは最近の発達障害、恐らく何人か出てきているだろうと思います。約1年でだいたいそのクラスを見てきてどんな対応をし、いろいろ期待をなさっているのか。もう少し年齢が大きくなって中学校くらいになると思春期問題も出てきますね。

小野塚　そうですね。発達障害、あと友達とうまくいかなくて不登校になっている子どもは外国人というより日本人にもいますので、そういうことは苦労していますが、上田の学校においては、「心の教室相談員」というのを配置して、そういう悩むお子さんに対するケアを行い、相談を行っています。従って、外国籍の子どもたちもそれに準じて対応していますが、どうしても言葉が通じないところもありますので、先ほどのバイリンガルの教員、あるいは指導員に相談が向かうということも多々あります。実際に不登校になりかけの子、あるいは籍を置いたまま来なくなって帰国してしまったという子もいるようですけれども、学校の中ではできるだけの対応ということでやっています。

井上　引き続き上田市立東小学校の増田善雄校長先生からお話をいただきたいと思います。

● ブラジル人児童は何を学んでいるのか

増田善雄

増田善雄　今日は発表の機会を与えていただき、本当にありがたいと思っています。大勢の皆さんからぜひご意見をお聞きし、それを参考にして前へ進んでいきたいと思っています。よろしくお願いします。

自己紹介よりも、学校の紹介をしたいと思います。児童数は、600人です。うち外国籍の児童は20～25人いて、市内の小学校では3番目に多い。また、本校は空き教室も結構あり、そういう関係もあって「虹のかけはし」ができたと思っています。なお、近くには神川小学校があって、これが上田市で一番多い児童数を誇っている学校で、外国籍児童が50

人前後います。「虹のかけはし」を本校につくっていただいてありがたかったなと私は感謝しています。

児童・生徒は、小学校1年生から中学校3年生まで、いろいろな子がいます。そして、いろいろな学校から来ています。現在はブラジルの子どもが7人います。彼らにとって、日本の学校は楽しい、そしてこの我が東小にとっても、本当に子どもとの触れ合い、交流の中で、意義のあるそういう時間が持てればいいなと思うと同時に、特色のある学校づくりにも関連させていきたいと思っています。双方にとって意味のある日々を過ごしたいという願いで行っています。

指導者の方は、先ほど話がありましたように、本校の場合は県の常勤講師、そして市の「虹のかけはし」の補助員1人が6～7時間くらい来ていただいています。それからボランティアの方が2～4人来ていただいて運営をしています。指導者の1人は、ブラジルで教員をしていた人で、日本に来ての苦労や、そのときの気持ちと今の子どもたちを重ね合わせることができるし、ブラジルそのものについても深い知識やいろいろな思いを持っているので大変ありがたいと思っています。また、地域のネットワークというのも持っていて、これもありがたいことだと思っています。また、保護者の大先輩ということで、いろいろな面で頼りにされ、親にも教育ができるという人です。

指導内容ですけれども、最初は初級。1年生が5人ばかりいますので、1年生専門の補助員、それ以上は講師の方でというふうに分けたり、またはボランティアの皆さんにお世話になったりしてやっています。とにかく最低の目当てとしては、それぞれの学校に行ったときに、担任の先生の言うことがある程度理解できるというところまで高めていきたいと考えています。特に日本の習慣を、やはり体を通すということで、時間を守るとか、忘れ物の報告をするとか、無言清掃。本校は無言清掃をやっていますので、黙って掃除をする、こういうことについても徹底して指導をしています。そのほかに校内の学級と一緒に体育をするということもありますし、「虹のかけはし」独自では、水泳をやったり、パソコンをやったり、音楽も時々音楽専科に教えていただいたりしています。全校の行事などについては、ひとつの学級として位置付け、みんなと一緒に活動をしています。

それから日本の習慣ということで、七夕とか花火とか、そして遠足のときのおにぎりの作り方、それからクラブで真田陣太鼓をやったり、それからスリッパを洗うというようなこともやったりしています。中には、5年生の女子児童でとても勉強が好きで、ぜひ大学に行きたい、と話す子もいて楽しみです。その子の日記を読ませていただきます。

「10月30日火曜日、今日はコンピューター室に行きました。ケンジ君も行きました。上田市の地図を見ました。東小学校を探しました。その後でディズニーランドを探しました。ゲームをやりました。絵を描いたり塗ったりしました。とても楽しかったです。」

漢字も使ってあってなかなか素晴らしいと思います。毎日、日記を宿題として出して、それを担任の方で朱書きで直しています。教材は、この子に合わせたプリントを用意ということで、東京外大多言語・多文化教育研究センターのものをダウンロードして使ったり、市販の学習帳や学習プリント、そして教師の自作プリントを使ったりしています。

● 育まれる子ども同士の友情

教室の運営ですが、本校の日課に合わせて、給食も掃除も行っています。下校は4時少し前。送迎は、保護者にやっていただいています。それから、だいたい3～6カ月で、これならば大丈夫だなという子には、市教委で作っていただいた修了証をあげています。すでに30人ほど修了しています。

初めて修了証を最初の子どもに校長室でそっと渡したら、ほかの子たちに、「校長先生、あの人はいつ行っちゃったの？」「やっぱりみんなの前で渡してくれない？」とこういうふうに言われたので、とにかく全校生の前で修了証を一人一人に手渡す。そして、お別れの言葉もたどたどしくも日本語で言っていただくというふうにしています。

それから、在籍校との連絡もありますけれども、これは月ごとに、連絡用紙があり、学校の様子、出席の日数などを調べます。そして校長と担任から印鑑をいただいて、また戻ってくるということでやっています。

子どもたちの反応ですが、学校は全員楽しいと言ってくれています。その中で何が楽しいかというと、低学年は広い校庭で遊ぶこと、大きくなってくると図工をやったりパソコンをやること。中には全部楽しい、漢字も楽しいなんて丸を4つ付けた子もいますね。じゃあ、困ることはと聞いたら、漢字と言う子もいました。でも、どの子どもも、やはり友達とのコミュニケーションをどうやってつくったらいいか、これが難しい、困ると言っていました。何とか話せる友達が欲しいなということを言っていました。

勉強は難しいかと聞いたら、難しくはないと言っていました。中には、図形や九九など、そういう特定の領域が難しいということでした。親の反応などを見ても、本当にありがたいし感謝しているということですし、また家に親が帰ってく

ると、今日は日本の友達と遊んだとか、誰と遊んだか名前を言いながら話をしているということもお聞きしています。

親は、小学校の今はいいけれども、じゃあ、中学校へ行って大丈夫か、高校まで行けるのかというところが大きな悩みだと聞いています。日本の社会に入っていこう、そして日本人と仲良くしていこうという雰囲気が親の皆さんにも年々増してきていると聞いています。

市民の協力については、ボランティアの方々のご指導があります。次に、市教委の呼び掛けで、ランドセル、ピアニカ、定規などを「虹のかけはし」に寄付していただきたいとお願いしたところ、たくさんのものを市民の皆さんから届けていただきました。同時に、教室の存在価値を知っていただけたかと思います。中には、個人的に寄付をしたいという人もいますし、外国籍の子どもたちが学級にいて素晴らしいというふうに言ってくださる方もいます。

こうした皆さんの協力もあって、本当に子どもたちは元気に来ているし、一生懸命勉強しています。やはり私は、日本語をしっかり覚えることによって将来の希望が持てる、そして夢を語れる子どもになるということが本当に大事なことだなと感じています。子どもたちの努力に対して、私たち教師は認めたい。そのことによってさらに前向きに子どもたちは力がつき、前に進んでいけるのではないかなと思っています。

30人の修了があるんですけれども、それぞれの学校で頑張っています。私どもの学校にもいて、これは1年ちょっとたった子ですけれども、日記を紹介します。

「今日の2時間目は図工をしました。楽しかったです。絵を描きました。それで絵の具を塗った。2時間目休みはともだちといっしょに遊びました。虹のかけはしに行きました。ともだちのいっしょに話をしました。」

助詞の使い方はちょっとと思いますけれども、こんなような日記を、書いてきているということです。

職員からは、「こういう教室があって助かっている」「来ると言葉が通じてありがたい」「日記を続けられる子どももいる」「まじめに取り組む子どもたちが多い」——そんな声が出ています。

● 将来の進路をどう考えるか

最後に課題についてお話しします。次の年とか来月の子どもの人数の見通しがもてないということ。次に、コーディネーター役ということで、それぞれ特色が

ある活動をこういうふうにしたらどうかということで教頭にお願いしているのですがなかなか忙しくてできないということで、この役を担う職員を育てることが大事かなと思っています。また、親や子どもの一番の悩み、心配である高校進学、入試、これをどんなふうにこれから考えていけばいいのだろうかと。ある高校では、本校の講師を呼んで職員研修というようなことで始めました。こういう高校も出てきて、少し明るくなってきたかなと思っています。

期間の問題もあります。子どもによって3～6カ月ということになりますけれども、もう少し弾力的にしなくてはいけないかな、でも前例になっては困るなというようなことも思います。あと、校内の学年、学級の継続的な交流を少し考えなくてはいけないかと思っています。まだまだ夢です。ブラジル人学校も含め、お互いの学級などで交流とか、いろいろなことを深め合えればいいなと思いますし、同じ仕事をやっている職員同士で、悩みとか教材開発について考えられる時間もあればありがたいと思っています。

修了していった子どもたちもさらにキチンとフォローしていきたいと思います。「虹のかけはし」で本当に役立っていることは何だったのだろう、さらに力をつけていきたいことはどういうことかというようなことも、もう少し調べなくてはいけないと思っています。

とにかく「虹のかけはし」で勉強した子どもたちが、希望を持って日本が好きだ、日本のために役立ちたいというようなことが素直に口から出るような、そん

な子どもを育てるべく、また皆さんからお知恵を借りながら前に進んでいきたいと思いますのでよろしくお願いします。

井上　ありがとうございました。今のご説明で質問はありますか。

阿部　ひとつだけおうかがいしますが、外国籍の子どもさんたちに対するいろいろな支援をされていることはよく分かったのですが、逆に日本の子どもさんたちに対する国際理解教育、例えばブラジルのいろいろなことを教えるとか、あるいはほかの国の人々について教えるとか、東南アジアの子どもたちについて学ぶとか、そういうふうな逆の時間というのはありますか。

増田　本校には、日本語教室というものがあります。これは、日本語はある程度話せるが、今度は教科の勉強でもう少ししっかり教えてあげたいなというものが上田市にある。11月は「なかよし月間」というのがあって、そこでブラジルが主ですが、それぞれの国の様子を話したり、ポルトガル語で話をしたり、言葉の紹介をしたり、友達にうれしかったことを発表し合ったりというようなことを例年行っています。

阿部　日本人の子どもたちにということですね。

増田　そうです。向こうも発表するし、こちらも返すという。

井上　どうもありがとうございました。最後に、親と子の日本語教室代表、浅井常子さんからお願いします。

浅井常子　皆さんこんにちは。私は「みのりの会」という日本語教室を立ち上げて、今年で11年目になります。上田市国際交流協議会は上田市の80周年記念を機に、市もこういうものを立ち上げたらどうかということで06年まで7年間、会長を務めさせていただきました。今は会の顧問をしています。もうひとつ、文化庁支援の下「親と子の日本語教室」という形で上田市でも立ち上がって、この会長をしています。「うえだ百勇士委員会」というのが、市民課課長さんからお話があったように、市民の声を聞いて行政に生かしたいという市長の考えで、会が誕生し、いろいろ見えてくるところで行政にちゃんと位置付けしてもらうには提言をしなければということで、「つきあい隊」に所属して、副隊長をしました。

浅井常子

● 留学生との交流からスタート

まず、「みのりの会」ですが、これを立ち上げたときはまだ市に市民レベルの

国際交流というか支援というものが何もないときでした。市内に信州大学繊維学部があって、そこには20～30人の中国からの学生がみえていました。日ごろ研究、研究で、上田市にいても街のことも、日本の文化のことも全然分からないままお帰りになる方がいることを聞きました。それではいけないと、日本へ来たからには日本のこの地域の人とのかかわり、日本の文化を知ってもらうことが第一ではないかということで、お茶とか、お花とか、着物を着るとか、文化を知ってもらうということで、招待パーティー形式で交流をしていました。しかし、やはり日本語ももう少し勉強したい、日本語能力試験1級を取りたいという方がチラホラみえたので、日本語教室に形を変えて、日本語を勉強しながら向こうの文化を教えていただき、こちらの文化も知っていただくという形にしました。やはり漢字の国から来ていますので、本当に皆さん吸い取り紙のように日本語がドンドンうまくなって。優秀な方たちに囲まれて、私たちも大変勉強をさせていただいております。

当時、上田市はゴミの問題で、外国人が守らないと、トラブル的なものがチラホラ聞こえたので、日本語1級を取った方に、ゴミの取り扱いなどを外国語に翻訳していただいて、それを環境課へ置いていただくとか。収集の方法が変わった際も、2度ほど提出して、会は市から感謝状をいただいています。

そうこうしているうちに、ブラジル人がどんどん増えて、市国際交流協議会を立ち上げました。国際交流協議会というのは、市にあった国際交流にかかわる団体を集めて、ひとつのユニットにしようということから始まりました。ですから、各団体それぞれが、いろいろな目的を持って外国人とかかわっている。ライオンズクラブとか、ロータリークラブとか、中国語、韓国語を学んでいるクラブとか、当初は18団体で協議会が発足しました。

この中では、いろいろなイベントがダブっていたというので、じゃあ、みんなでひとつ大きなことをしようというまとまりの中から、上田市国際交流連絡協議会という名前で出発しました。

● 在住外国人増を市民は知らない！

クリスマスパーティーとか国際交流フェスティバルをみんなで一緒にやったのですが、ロータリーやライオンズなどは、毎年、国際交流担当の方が代わりますので、担当者によって温度差があったり。私たちも日本語教室からかかわったのですが、毎週自分たちの活動があり、また協議会のイベントにもかかわらなければいけないということで、大変負担になってきて、最近は協議会のパワーが落ち

てきており、この辺が課題かなという感じです。最初に立ち上げたころは長野五輪が控えていたので英語圏の方が多くて、本当にパーティー的なものだったのが、今度はブラジルの方たちや本当に言葉の分からない方たちが増えてきて、支援を中心に据えることになり見直す時期とも思われます。

上田に外国の方が増えてきているということを市民がどれだけ知っているのか、疑問に思いました。国際交流フェスティバルを、もっと多くの市民を呼んで、外国籍の人の文化などを理解していただこうということで、国際交流フェスティバルを開き、06年は13カ国の料理の試食、11カ国のお茶とお菓子、30ブースの展示で、公民館全館を使い、1,500人から2,000人の方が訪れて、市民に各国の食文化などを味わってもらいました。

それから、ブラジルの方が多いということで、「ブラジル田舎まつり」が開催されています（資料p.126参照）。これは全国的に有名になっていると思いますが、臨時領事館を開設したり、ブラジルの食材やブラジルの歌や音楽を皆さんには味わってもらおうという試みで、07年で9回目を終えたところです。ここで私たちは、お手伝いを2日がかりでやっています。やはり協力がなければ、ブラジルの人たちだけでは大きなイベントを開くのは大変なことだと思います。市内に県立染谷丘高校があります。その中に国際教養科があって、そこの生徒さんにも全面的に「ブラジル田舎まつり」をお手伝いしていただいています。次第に多くの上田市民がかかわってきて、ブラジルの文化というものが分かりかけてきたのではないかと思っています。

● 在住外国人への先入観

市では多文化共生に関する市民へのアンケートを取りました。外国人に対してのイメージ、外国人に対してどう思うかというところで半分以上の人が、外国の方はパーティーなどでうるさい、ゴミのルールを守れないなどの理由で、外国人に対しての印象が芳しくない。アンケートの質問で、「実際にあなたは外国人から迷惑を受けたことがあるか、トラブルにかかわったことがあるか」という質問には、80％がそういうトラブルにかかわったことがないという返答がありました。これはまさしく、先入観で外国の方を見ているんだということに気が付きました。私たちは、学校とか公民館事業の中で、あえて外国の方との交流の大切さ、これから将来は外国の方たちと、同じ目線で一緒に生活していかなければいけないのではないかということで、アピールすることも私たちの仕事ではないかと思っています。

社会福祉協議会の入り口に、「国際交流コーナー」のスペースを設けていただいています。そこで日本語を勉強に来る方、去年まで本当に多くの方がみえていました。学習中の騒々しさを改善する方策を考えると共に、ボランティアの人数の補充などをしてもっと充実させようとしています。07年から少しトーンダウンしていますが、06年は延べ600人が訪れています。

国際交流フェスティバルの中に、外国籍の子どもたちの意見発表があります。以前は、いろいろな国の大人に発表をしていただいたのですが、日本人の前でスピーチすることを意識してか、本当に日本の人は優しいとか、お世話になってありがとうございますと、最後の言葉はみんな同じ。本音が聞けないのではないかというところが見えてきて、05年からお子さんに絞って、小、中、高の児童・生徒に意見発表をしていただいています。その中で、日本の人たちとのかかわり、いじめられたとか、こういうことが楽しかったとか、こういう食べ物は全然食べられなかったとか、本音を聞くことができて、よかったと思っています。

地域と日本語教育の観点で開かれているのが、文化庁の企画でスタートした「親と子の日本語教室」です。これは日本の学校へスムーズに入れるように、親子で日本語の勉強に来ていただく目的から始まったのですが、フタを開けてみると、親が会場に連れてこなければ来られなかったり、親の仕事の都合でどうしてもダメだったりということで、親と子の教室といっても、現在はほとんど大人の日本語学習者が圧倒的です。皆さん仕事を持っていますので、日曜日の10時から正午までという時間帯でやっていますがなかなか続きません。現在、15～20人が訪れています。それぞれ皆さん国も違うしレベルも違うので、ボランティア側は対応が本当に大変な状態です。

市の広報紙の06年10月号で、「虹のかけはし」の特集号を全戸に配っていただきました。その中で、県の課長さんは、これが立ち上がったのは、市民レベルの意見でできたんだとおっしゃってくださったのです。日本語教室というのは、毎週顔を合わせて信頼関係ができるので、仕事上のトラブルや、学校へ行けない理由など、本音が聞けます。みんなどういうことに困っているかが本当に聞ける唯一の場所が日本語教室ということだと思います。

そこから見えてきたもので、私はたまたま協議会の会長をしていたので、県にも、ぜひこういうことが必要ではないかということを言う機会がありました。県が認めてくれても同時に市が受けていただけなければ、これはまた成立することができません。「うえだ百勇士委員会」で20近く国際交流に関して提言をさせていただきました。1回目の提言でアヤフヤで終わった場合は、次の機会にまた提

言するといった具合にしつこく提言をして、それに納得いく回答をいただくまでやりました。県も、市に呼び掛け、ちょうどタイミングが合い「虹のかけはし」も道を開くことができたと思います。

支援会議も「うえだ百勇士委員会」で、「つきあい隊」みんなで、必要性を感じて提言しました。そこから青写真ができてきて、支援会議もできました。日本語教室というのは、こういうパワーがあるんだということをつくづく感じさせられています。皆さんも、いろいろ条件の中で日本語教室をやっておられますが、活動の中で見えたものを行政へ提言としてつなげていかないと、前へ進まないので、行政も巻き込んで行動を起こしてほしいと思っています。

井上　どうもありがとうございました。だいぶ時間が超過してしまっていますが、ここでコメンテーターの方に、質問ではなくてご意見をいただきたいと思います。

● 未就学児童や地域での受け入れ対応は？

佐藤　手短にお話をさせていただきます。私は特任研究員で別の班の仕事をしています。川崎市に「ふれあい館」という在日韓国・朝鮮人を対象にしたコミュニティー施設がありますが、最近はその地域にフィリピン系の子どもたちが増えてきているので、フィリピン系の子どもたちに対する支援を地域の側から考えているところです。

佐藤郡衛

なぜそんな話をしたのかというと、今日、うかがっていると、上田市の特徴は行政が中心だということです。ここに市を挙げて出席され観光案内をしていただくというのもその表れです。しかも、市がこの教育に対して具体的な指針も制定しているし、さまざまな施策も講じられているので、行政中心が非常に有効に働いているように思います。つまり、制度化され、予算化されていくということ自体が教育の中では大事だというところは、非常に評価できるところだと思います。

そして、今日お話をいただいた集中日本語教室、「虹のかけはし」がつくられたというのも評価できます。外国から来た子どもたちが突然、日本語の学校に放り投げられれば、子どもも困るし学校も困る。そこで、集中的に日本語を教授する教室を行政が中心になって進められているということは、非常に大きな意義があると思います。

ただ、今日はお話をうかがえなかったのですが、行政で把握できない、特に教育委員会サイドでは把握できない点についてどのようになっているかを知りたい

なと思います。例えば、ブラジル人学校の問題や未就学の子どもの問題です。地域で外国人の子どもに対する支援を考えたときに、この問題は避けて通れないはずです。この点についてうかがいたいと思います。

次に、上田市の特徴は、ボランティアも含めて学校への支援が中心になっていますし、それなりに一定の効果を上げているということは分かりました。ただ、子どもたちが生活をしているのは地域ですから、地域での受け皿はいったいあるのだろうかということです。放課後、午後4時ぐらいまで「虹のかけはし」の教室にいるということですが、その後や土曜、日曜はどのように対応しているかということです。先週、私は愛知県豊田市の保見団地の中にある西保見小学校で研究発表会があって行ってきました。保見団地も小学校と地域のNPOとが必ずしもうまくいってなかったのですが、このところ地域の子どもたちを受け入れているNPO法人が学校と連携し始めました。学校からの宿題を地域のNPOが担当しているということです。学校の先生が地域のNPOに、「今日はこんなことをやりました」と連絡をする。そうすると、宿題を見たNPOから学校側に連絡ノートが回ってくるというのです。こうした取り組みで、学校と地域とのつながりをとっています。上田では、地域の受け皿がどうなっているかを知りたいと思います。そうした取り組みは実際にあるのか、あるいはそういうことをどう考えておられるのかということです。

それから、増田校長先生からとてもいいお話をうかがったのですが、「虹のかけはし」と在籍学級とのかかわりです。これは追跡調査をぜひやりたいと先ほど課題として提案していただいたのですが、こういうことを積極的に進めていただければと思いました。さらに、今日のお話にもありましたが、こういう子どもたちが高等学校に行く、そのとき小学校と中学校の連携をどうしていったらいいのかということがあります。というのは、小学校で外国籍の子どもたちにつけたい力と中学校で子どもたちにつけたい力は明らかに違っています。小学校では生きてゆく力、基礎的な力を重視しますが、中学校では受験に対応する力をつけていかざるを得ない。これは日本の子どもの課題でもありますが、この問題をどのように考えていったらいいのかということも併せて考えてみたいと思います。

12月の全国フォーラムに向けて、私も考えてみたいのですが、日系の方々の特徴として、一時滞在か帰国かということではなく、行ったり来たりする、いわば「越境」が特徴になっています。今日うかがっても、国を行ったり来たりするような子どもたちが増えてきています。例えば3カ月か4カ月間ブラジルに戻り、また日本に戻ってくるというようなことがあります。さらに、上田市から愛知の

方に移っていく、つまり地域間の越境をする人が多くなっています。さらには、日本の学校とブラジル人学校を行き来する子どもも出ています。こうした「越境」する子どもたちに対する教育ということへの知見を持っていません。一時滞在だったらある程度の日本語を覚えて体験的に入学させるということもできます。定住する子どもであれば、日本語を教えて、子どもたちのアイデンティティーを保障していくために何かいろいろなことをするといった議論はしてきました。しかし、こういう「越境」する子どもたちの教育の問題に対して私たちはあまり知恵がないのです。こういう子どもたちの問題を具体的な地域をフィールドにして考えていかないといけないのではないかと思います。これは私どもの班でも考えていきたいと今思っているところで、今日答えを出すということではないので、課題だけ提案させていただきます。今後、「越境」する子どもたちの問題を全体としてどう考えていくか。しかも、上田というひとつの地域の中でどう考えていったらいいのか、具体的に行政としてその子どもたちにどう手を差し伸べていけるのかということも併せて考えていく必要性があるのではないかと思っています。

井上　ありがとうございました。ひとつずつお答えをいただいていると時間が足りませんので、最後にまとめてお話ししたいと思います。次に阿部先生、どうぞ。

● 心の問題を抱える子どもの背景を考える

阿部　私は、夏から秋に4回ほど上田市に足を運びました。そのうち2回は外国籍の子どもたちとご家族と全部で12回、面接をしました。お父さん、お母さん、子どもたちと一緒にしました。もう1回は、イベントのときに心の相談コーナーというものを設けて、そのときは3人ほどやってきました（資料p.126参照）。その辺で自分が感じたことと今日のお話から、いくつか取り上げてみたいと思います。

阿部　裕

ひとつは、最初のところで上田市の多文化共生に関する調査がありました。この調査の6つのうち4つが子どもに関してでした。これにはビックリというか、子どもたちのことを重要視してこういう調査をしたのかなということと、本当にこの調査で行われたことが実際にいろいろな形で日の目を見ているのだと思いますけれども、この調査がどのぐらい役立っているのかというあたりをお聞きしたい。それから、もう少しこういう点が足りないとか、こんな調査をしてみたいということがあれば、併せてお聞きしたい。

それから、私の場合どうしても心の問題に視点がいってしまいますので、その辺を少しお話しします。今回の面接や相談コーナーで思ったのですけれども、子どもたちからの相談がある場合、この子どもは問題があるのかないのか。例えば家の中で非行性があるとか、片付けができないとか、あるいはお友達ができないという場合、それがごく普通の子どもたちの正常範囲なのかどうか。結構、神経質になってしまったりということで、この子に将来の悩みや心の病気があるのかないのかというところでまずすごく心配している。その辺の振り分けをどうするかというか、そういう支援を地域の中につくっていく必要があるだろうと思いました。

実際に発達障害なら発達障害という診断がついてしまった人を地域の中でどう抱えサポートしていくかというのは、外国籍の人たちはやはり難しいですね。というのは、先ほども心の相談員というお話をいただいたのですが、子どもはある程度、日本語ができるかもしれないから、心の相談員とお話はできるでしょうけれども、常に心配したり、問題を抱えるのはやはりお母さん、お父さんです。お父さん、お母さんと、子どもたちと学校というふうな形で連携を取らないと、そういうふうな心の問題、あるいは発達障害というのは支援できないと思います。例えば教育委員会なら教育委員会に行っても言葉の問題がなかなかクリアできない。学校などでもそうですけれども、校長先生が入ってくれても、通訳が入ってもなかなかうまくいかない。

上田市の場合、非常に優秀な通訳が何人もいて本当に驚いたんですけれども、十分、医療通訳もお願いできるような方もいらっしゃいますので、連携の仕方をどうするかということをある程度システマチックにつくってゆけば、その辺の支援はキチンとできるのではないかと期待しています。いろいろな集住地域があると思いますが、その辺までキチンと手を伸ばしてやっているところは恐らくまだないと思います。そういう意味で、上田市がモデル地区となってぜひそうしたものをつくっていただきたいという期待があります。

さらにもうひとつ、先ほど佐藤先生も話されましたが、子どもさんたちの心の安定ということになってくると、やはりご両親が安定している、仕事の問題、就労の問題もそうだと思いますが、就労も安定している、あるいはご両親がある程度、地域の中でほかの日本の方々と交流できるということが必要になってきます。中国人花嫁の問題もありますが、一番多いのは山形県です。外国人花嫁というと、最初はフィリピンから農村の長男に嫁ぐ花嫁さんが多かったのですが、だんだんより日本人に容貌が近い方がいいだろうということで中国や韓国に変わってきた

という経緯があります。そういう花嫁さんたちは全く日本語ができないでスパッと入ってきます。そこで自分自身が日本の農村文化の中で適応していかなければいけないということがあると思います。適応していく中で、嫁姑問題という形で、山形、秋田、新潟などで報告があります。それを早期の段階でそれなりのネットワークをつくっていくということがないと、嫁姑の葛藤などが出てくるだろうといわれています。

その辺は日系人も同じだと思いますが、私の場合、日系ラテンアメリカを中心に診ています。ラテンアメリカ人だけですけれども年間に70～80人にはなると思いますが、心の問題を抱えてしまう人がいます。日系ラテンアメリカ人5,600人だと2％から3％は必ず心の問題を抱えていて、場合によっては医療機関の受診が必要となると、100人ぐらいの人が上田市にも必ずいるはずです。ただ、そういう人たちが受診しているのか、あるいは病気になってしまったら帰国するのかどうかというのは、恐らく時期によっても違うし、個々人でも違うと思いますが、その辺のところはいったいどういうふうになされているのか。あるいはあまりそういった支援がなされていないとしたら、そういう仕組みをつくっていくことが外国籍の人たちの安心感にもつながるし、また心の支援もやはり必要ではないか。

井上　洋

井上　ありがとうございました。ここで整理いたしますと、最初に佐藤先生から、上田市は比較的、学校を中心に、行政を中心に効果を上げているだろうけれども、もう少しNPOと学校の連携があってもよいのではないか、というお話がありました。そのあたりは時間があれば、再度、ご説明いただければと思います。それから小中学校の連携、あるいはそろそろ高校に行かれている子どもたちもいると思いますが、中学生に上がった子どもたちに学力をどのようにつけさせ高校に行かせるか、そういう取り組みは他の都市、例えば川崎などでは実施されていますが、上田では行われているのか、というあたりもひとつのテーマになるのではないかと思います。

それから、私自身が今一番関心を持っているのは、日本とブラジルの間の移動というよりもむしろ国内の移動です。国内で日系人の親たちが仕事を求めて移動したときに子どもは付いていっているのか、あるいは母親と兄弟と一緒に従前の土地に残っているのか、ということです。父親がいないということになると家庭そのものが不安定になりますし、家族ともども移動する場合にも、子どもの心理

状態は不安定になります。このあたりの調査はおそらくひとつの都市ではやれませんので、集住都市会議あたりでしっかりやってもらわないといけないかなと感じました。

ウラノ・エジソン・ヨシアキ

それから阿部先生の話は、子どもをめぐる調査はずいぶん充実されているということで、これが実際に「虹のかけはし」の設立に向けて役に立っているのではないか、そして今その調査結果によって、さらにどのような政策が立案できるのか、企画できるのか、というようなものだったと思います。この点については、12月の全国フォーラムの際にさらにつっこんで話していただけるとありがたいと思います。

ここで前半に鼎談に参加していただいた田村さんとウラノさんに一言ずつ、これまでの説明、コメントに対して何かあればお話しください。

ウラノ　上田市が教育の面や生活の面など、いろいろな面で取り組んでいらっしゃることは本当に素晴らしいことだと思います。私の話の中でも先ほど少し触れたと思いますが、これからの課題として佐藤先生が触れた越境的な動きの中で皆さんが生活していらっしゃるという面がとても重要になってくるのではないかと思っています。それに対しては出来上がったものはないと思います。教育にしても、例えばカリキュラムが日本におけるブラジル人学校で勉強した子が日本の学校に行って、その後ブラジルに帰って2年間ブラジルで勉強してまた戻る、本当に大変なことだと思います。出来上がった制度みたいなものはありませんが、その辺の継続性などを何かの形で把握しないと、成長を支えていくという意味での教育の有効性をこれからつくっていくのは難しいかなと。その点について少しコメントしたいと思います。

田村太郎

田村　大変興味深いお話をありがとうございました。最後の浅井さんの市民の力、文句を言っていても始まらないので提言しましょうというのはその通りだなと思いました。教育はもう皆さんおっしゃったので、私からひとつ。教育の次は就労ですね。中学を出て、あるいは高校を出てから仕事があるのかどうか。結局そこがないのでほかの集住地区など、関西もそうですが、就学が進まないのです。学校の先生は、中学を出て頑張って高校を出れば仕事があると言いますが、結局、高校を出てもお父さんと同じ工場で働いている。

「何で、ウソや、こんなの、だったらもう高校へ行かなく

てもいいじゃないか」と、中学も途中で来なくなってしまうというケースをたくさん見聞きします。企業からの寄付も必要ですが、雇用、あるいはインターンのような形で就労体験のようなものを提供していただくなどのかかわり方がすごく大事なのではないか。提案ですけれども、就学のところに就労の支援をどうしていくのかというあたりを、12月の全国フォーラムには企業の方も来られますので、できたら議論したい。

あとお聞きしたいのですけれども、大学がどうかかわるのかということです。よくいろいろな研究者がいろいろな集住地区に行って、いろいろな研究をするのですが、ちっとも役に立ってない。せめて東京外国語大学は役に立つ研究、役に立つ実践をすべきです。それぞれポルトガル語の学生さん、日本語の学生もいるでしょうし、ボランティアコーディネートができる教員もいると思います。今日あればうかがいたいし、12月でも構いませんので、東京外大に対するリクエストをぜひお願いしたいと思います。

井上　まずNPO、あるいはボランティアと学校の連携という点で、具体的に何か今行われていることがあれば教えていただきたいと思います。

小野塚　外国籍と限らないのであれば、放課後の児童対策というのはどこでもやっていると思うんですけれども、児童会、児童クラブに通う子どもたちの中に発達障害の子どもも増えています。そちらの支援のためにNPOの方にかかわってもらっているという事例もあります。

● 次のステップをどう形成するか

井上　恐らく外国人、日系人という特殊な立場にいるということで、彼らを優遇するわけではありませんが、注意深く面倒を見ていくということになると思います。そういう点で、最終的に阿部先生がお話になった心のケアの問題になると思いますが、やはりそこまでのことはまだ、できてないという感じがいたします。

増田　阿部先生が指摘されたようなところまでの意識でやっているかどうか私は分かりませんが、保護者の皆さんの悩みなどは、うちの講師の方にとにかく電話がよくくると。夜10時を過ぎてもくるぐらいで、本当に保護者の皆さん、聞いてもらえる先生は誰かと言ったら、バイリンガルの先生しかいませんので、たくさん相談がきています。

それから、外国籍の皆さんが一緒になるという機会があります。参観日も実際はなかなか来られないわけですが、本校は東小祭というPTAのお祭りがありますが、模擬店を出すのですが、ブラジル人の親の皆さんが年に1回集まって、い

ろいろ話すという機会となります。そういうところにも日本の学級代表の方が少しでも入っていって一緒にできればいいなと考えています。

子どもたちについては、うちに帰っても夜7時から9時までは誰もいない。兄弟も少ないということで寂しさに泣いてしまう子どももいるようです。従って、「虹のかけはし」は、とにかく甘えさせるときには子どもたちが甘えてくるようにしようというようなことでやっていますし、子どもたち同士が本当に母語でべらべらとしゃべるという、その時間も大事にしなくていけない。「虹のかけはし」のない学校では、母語で話し合うということでは日本語教育指導員が市にいて、これが例えば金曜日の1日だけ来るということで各学校を回っています。そういうときにはみんなを集めて、本当に言いたいことを母語でしゃべったり、話したり、悩みを出したりと、そんなこともやればできるという体制はあるかと思っています。あらためて、今お話をお聞きしていてちゃんとした組織をこれから考えていかなければいけないと思っています。

井上　お聞きしている感じですと、最初のステップはなされているみたいなので、その先のまさに先生がおっしゃったように組織化やシステム化が必要だと思います。せっかく阿部先生がこの上田市にかかわってくださっていますので、何か適切な提案ができれば、東京外大の研究として、役割を果たせるのではないかと考えます。

それから、小中の連携の中に受験の準備というお話が佐藤先生からありましたし、子どもが頑張ろうという気持ちを持つために、教育現場が果たす役割は非常に重要です。それから、日系人の子どもたちは、日本語がかなりできるようになったとしても、個々の教科を考えるとやはり不利な面があるので、ある程度優遇して高校に上げていく仕組みが必要だと思います。その点で上田市や長野県は、何か特別なことはされていますか。

小野塚　長野県内の高校はかなりが県立高校なので県教委の方でやっていることもありますけれども、来日3年以内であれば、特別枠で高校に入れるという枠がありましたよね。

春原直美（長野県国際交流推進協会常務理事兼事務局長）　では、引き取ります。長野県国際交流推進協会の春原です。今の高校入試についてのお話ですが、長野県の場合は特別枠ではなく特別配慮という形です。枠ではなく特別配慮。ですから入学定員の外で合格者を出すのです。その内容ですが、外国籍の子どもは来日3年以内、中国帰国者の子どもたちは来日6年以内、それから、最近増えてきているのが、お母さんが東南アジアからの人で国籍は日本人という子どもが多いので

すが、お母さんの出身国で生活をされている子どもを日本人の帰国子女ということで帰国2年以内、高校入試について特別な配慮を受けることができます。内容的には5教科受験になりますが、そのうちの1科目、社会科については面接、国語については作文、あと3教科は日本人の子どもと同じ内容のものですが、難しい漢字にはルビが振られます。それから、試験時間が10分間延長になります。こんな配慮がされて、長野県の場合、通学区が4つありますが、隣接地、隣接の通学区から受験ができますし、都会地の都道府県のように指定校制度はとっていませんので県内どこの高校でも受験ができます。具体的に名前を申しますと、長野高校や松本深志のような進学高校に入っていく子どもたちもいます。入った後は特別配慮がないわけですから、日本語力の問題が相当のウエートを占めます。長野県の場合は、以上申し上げたような制度があります。追加して申し上げると、私どもの協会と長野県教育委員会は共同して、4年前から外国籍生徒のための高校進学ガイダンスを県内4カ所で開催しています。上田市においても毎年開催しています。

井上　ありがとうございました。会場から質問を受けたいと思います。

質疑応答

質問者その①　外国籍市民支援会議に、構成団体として企業13社ということでした。この企業13社の特色や、あと会議でいろいろな意見が出ているとは思いますが、実際に何らかの取り組みに対する協力がどのような状況であるか、また今後どういった教育を期待していけるのか、そのあたりをお聞きしたいと思います。

小山　外国籍市民支援会議の参加企業についてですが、13社のうち製造業が11社、派遣会社が2社です。製造業については、機械、金属、電機で、大戦中に東京から疎開した工場がそのまま戦後に残って、地元の企業として、主にトヨタや大手の下請け中心ですが、自社製品を作って世界のシェアのトップを占めているというような会社もあります。従業員数は、一番多いのが1,000人ぐらいです。外国人がそのうち120人ぐらい登録しています。また、外国人の多いところを見ると、派遣社員ですけれども、電機関係だと約700人と外国人が200人というデータです。

　外国人雇用の状態が、今は規制がだいぶ強化されている状況です。それ以前に偽装請負、派遣研修問題といろいろな問題があったものですから、企業としては

まだあまりオープンにしたくないという立場ですので、自分の企業の名前は出さないでほしいとか、まだ少し引いている状況で、企業との連携も組織ができて間もないということをご理解いただきたいと思います。最近は法律も改正されて、外国人の在留期間や目的などをチェックしなさいという、これは努力義務ですけれども、企業意識も次第に変わっていくのではないかと思います。

また、13社については、外大の井上、阿部両先生たちも実際に現地調査を何回か行っています。そういった現地調査の協力は引き受けていただいているということで、その点については一定の効果が上がっているかと思います。

質問者その②　日本語教育のボランティアをしています。市の方ですけれども、ポルトガル語での定期刊行をしているということでそれはいいと思いますが、タイ、フィリピン、インドネシアなど、ブラジル出身以外の方が約半数いると思いますが、定期的に出されている市の広報にルビは振ってあるでしょうか。

小山　特に広報はルビを振っていません。ポルトガル語の広報を月1回出して、市の方は月2回ですが、それの要約版で1回に出るということで、特に日本語のものについてはルビは振っていません。

質問者その②　漢字がなかなか読めない、そのために広報を読まないという私の友人が、ブラジル人でも韓国の人でもインドネシアの人でもいます。漢字圏の中国でも、同じ漢字ですけれども、中国の漢字と日本語の漢字、共通点は多いけれども全く違う意味だとか、読み方が分からないために辞書も引けないということですので、多くの市町村にルビを振っていただけたら非常に助かるのではないかと思います。

もう1点。尾崎さんとウラノさんの気持ちの問題をおうかがいしたい。私が教育している日系ブラジル3世の女性ですが、日本に10年いますので日本語能力試験2級を受けるみたいですが、ブラジルにいたときにおじいさん、おばあさんからは、あなたは日本人ですよ、あなたは日本人という意識を持っていなさい、と言われて、あこがれの日本に来たところ、日本人からは、あなたはブラジル人なのねと疎んじられていると。じゃあ、私はいったい何なんでしょうというのがありますが、この辺のお気持ちはどうなのでしょうか。

ウラノ　私の場合にも同じことがありました。両親やおじいちゃん、おばあちゃんからは、日本人ですよということは言われましたが、あまり素直なタイプではないので、そうではないのでないかと。なので、そう言われながらも私はブラジル人かなというのがあって、その辺はあまり意識しなかったかな。思春期などには、自分は何なのということで、皆さん結構、葛藤していると思います。日本に

来るとやはり問題です。だから、人によっては空港の到着ロビーで外国人の列に並ばなければいけないということだけでもショックみたいです。だけど、私がいきなり私は典型的なブラジル人です、と言っても誰も信じてくれないので、何が典型的なブラジル人かということもあるのですが、両方の文化を持ったブラジル人というふうに私は感じています。

尾崎　それはショックはあります。ブラジルでは日系人は本当に信用のある人たちです。銀行でも口座は簡単に開けられる、金を借りることができる。ブラジルでは18歳になったら軍隊に行かなければいけないという法律があるので、私は1年間軍に行ったのですが、軍では、あなたはジャポネーズだな、と言われて。日本人だから信用があるからこの特別な場所に、銃や機関銃の管理をする房の方に回される。すごい、日本人の心であって、そんな信用されるんだなというイメージはブラジルでずっとありました。それでずっと生きてきたけど、出稼ぎに来るとそれが全く外人だなと。銀行口座を開くときもそう、教育委員会に行ったときも私の子ども、1年生、2年生のときに外人だから保証人が必要ですよと言われたのです。それでブラジル人だなと。そこでまた切り替えが必要。日本に来たらやはりブラジル人だなと。それは仕方がないので受けて、その通りに考えて生きているんですけど、本当にショックはあります。

ブラジルにいたとき、住んでいた村が、家族が全部日系人だったので、そこでいつも年上の人たちに、その村ではちゃんと青年会、老人会、日本人会、全部あったので、日本の文化をそこで学びました。そこではちゃんと挨拶も元旦などには全部。あるいは、青年会長をやったこともあって、挨拶は日本語で全部話さなくてはいけなかったのです。なのに、こちらでは何でお前は日本人の顔をして日本語を話すことができないのかと。だからそこで、その村ではちゃんと日本人の子ということで育ってきたけれども、日本に来るとそうではなくなる。自分が強くなかったら本当に怒ると思う。

質問者その②　先ほど紹介した日系ブラジル3世の女性には、「あなたは国籍に関係なく、地球人であり、国際人だというふうに言えばいいのではないか」と笑って話しました。

井上　全国フォーラムの初日の12月1日には上田市で事業所を持つ企業の方もパネルに登場します。もちろん、本日のメンバーも再び話をしますので、この続きが聞けると思います。私自身、企業の話は今日、全くしませんでしたけれども、企業の最近の戦略なども全国フォーラムで報告したいと思います。これで本日のフォーラムを終えたいと思います。